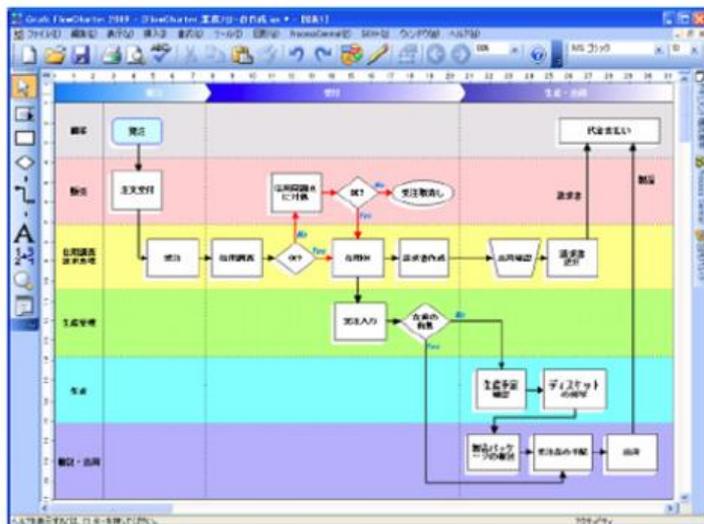


# DXはなぜ進まない？

## DX化計画における課題

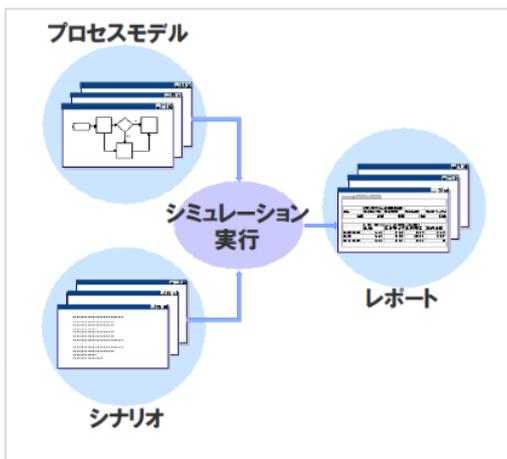
DXを検討する場合、業務プロセスの中で利用されるデータがどのように変化し、プロセスで利用できるように加工されながら次のプロセス、ロケーションへデータを送るかをイメージし、効率を考えながらプロセス改善していく必要があります。ただ、ここに大きな落とし穴があります。プロセスを中心に考えるために、実際の業務が優先されてしまい、DX化検討が後手後手になってしまうのです。この課題に対応するにはDOA - Data-Oriented Approach (データ中心アプローチ) がよいと考えます。もっとも実際のDOAによるアプローチはデータ基盤を確立する手法のため真剣に取り組むとそれなりの時間と労力が必要になります。そこでDOAのデータ利用形態を切り出して考えることで、データの流れと形状を中心として業務プロセスをみなおしてみれば、DXへの近道が見えてくるでしょう。



※業務プロセスをオブジェクト指向などの操作方法でマッピング

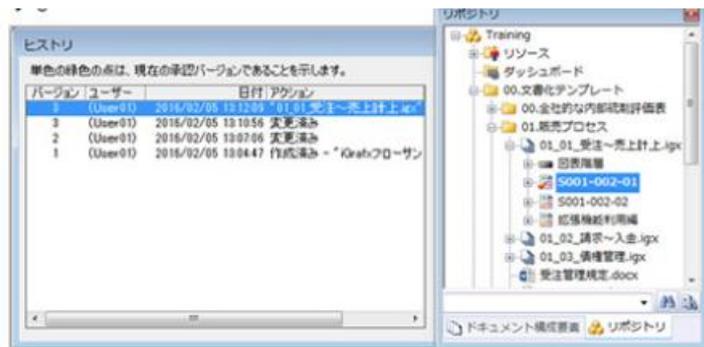
## 1. 業務プロセスの可視化

まずは、業務プロセスの可視化です。こちらはフローチャート化やフローで利用されるデータや時間、重みが設定できるツールなどの利用が推奨されます。シミュレーション機能など業務の無駄や改定の良し悪しを判断することができればなおよしです。



※生成されたプロセスモデルに、シナリオ(パラメータ)を与えて、業務プロセスをシミュレーション

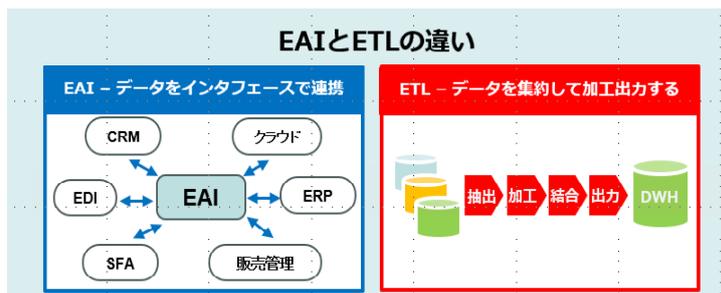
※データフローの組み込みにより、データの流れを的確に把握し、結果をレポートで確認



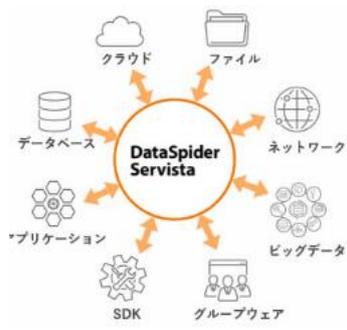
※ドキュメントの関連付けと一元管理 (データベースなどの利用)

## 2. データフローの確認

次にデータの流れ、入出力時の形態、ロケーションを確認し、インターフェースで何が必要かを検討しましょう。データの流れにはHUB型(EAI型)とETL型があり、流れの違いによってもインターフェースの選定は変わってきます。



EAI - Enterprise Application Integration  
ETL - Extract Transform Load

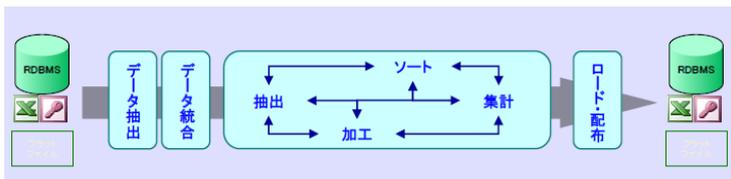


※インタフェースの選定  
(必要に応じてツールの活用を検討)

- <アプリケーション>
- DataRobot
  - Microsoft Dynamics AX
  - Microsoft Dynamics 365 for Customer Engagement
  - StraForm-X (3779)
  - 勘定奉行V ERP
  - 高蔵奉行V ERP
  - Universal Connect/X
  - Report Director Enterprise

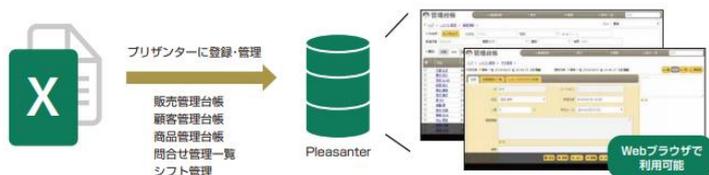
- |   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| <p>&lt;データベース&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Microsoft Access</li> <li>■ DB2</li> <li>■ DB2 for i</li> <li>■ MySQL</li> <li>■ Oracle</li> <li>■ PostgreSQL</li> <li>■ Microsoft SQL Server</li> <li>■ JDBC</li> <li>■ ODBC</li> <li>■ MongoDB</li> <li>■ NeoCore</li> <li>■ Thunderbus (DBエージェントプラグ)</li> </ul> | <p>&lt;クラウド&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Amazon Web Services</li> <li>■ Microsoft Azure</li> <li>■ Google Cloud Platform</li> <li>■ Salesforce</li> <li>■ kintone</li> <li>■ Box</li> <li>■ Tegaiki</li> <li>■ Google Workspace (旧 G Suite)</li> <li>■ GAEデータストア</li> </ul> | <p>&lt;ファイル&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ CSV</li> <li>■ Microsoft Excel</li> <li>■ PDF (画像変換)</li> <li>■ HTML</li> <li>■ XML</li> <li>■ 固定長</li> <li>■ 可変長</li> <li>■ ファイル操作</li> <li>■ ファイルシステム</li> </ul> | <p>&lt;ネットワーク&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ FTP</li> <li>■ JMS</li> <li>■ Web</li> <li>■ Webサービス</li> <li>■ メール</li> <li>■ Active Directory</li> <li>■ REST</li> </ul> |
|   |   | <p>&lt;グループウェア&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ HCL Domino</li> <li>■ HCL Notes</li> </ul>  |   |
|   |   | <p>&lt;ビッグデータ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Apache™ Hadoop® (Hadoop HDFS)</li> </ul>   | <p>&lt;SDK&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 追加アダプタ開発</li> </ul>   |

※データフロー上の機能に合わせたインタフェースを確認

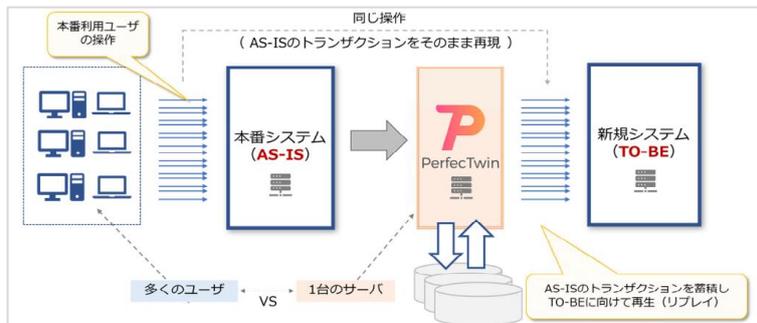


### 3. 実装計画・事前確認

データインタフェースの実装計画では、選定されたインタフェースの仕様から1で可視化した業務フローを必要に応じて見直します。資産・データの共有化によるプロセスの簡略化なども検討の一部となります。また、インタフェースが正しく動作できるか、フローにかかる時間は問題ないかなどのPoCなども有効となるでしょう。



※資産・データの共有化 (WebDBによる共有利用など)



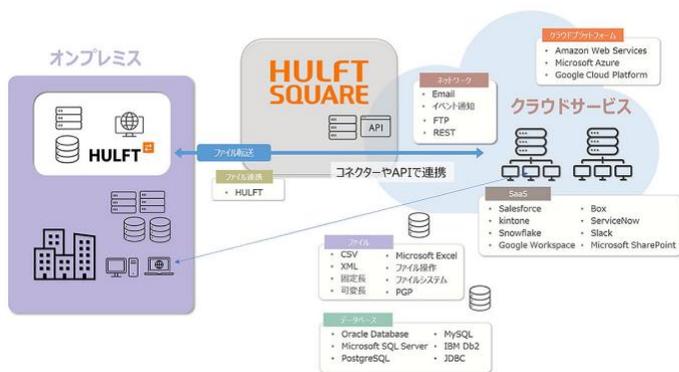
※PoCによる現新比較テストイメージ

### 4. 実装、業務切り替え

そしてインタフェース群の総合試験完了後に業務切り替えを行います。事前に実装計画でもこの業務切り替えのステップは考慮しておくべきです。業務プロセスは、可視化の段階で連携するプロセスと単体のプロセスに分類されますので、影響の少ないものからスモールスタートで順次切り替えていけるよう計画をたてるのが肝要です。

### 5. そしてDX推進へ

可視化された業務プロセスは、効率化や対コンシューマ対策により進化していきます。オンプレミス環境自身をクラウド化したり、ソフトウェアベースの資産をiPaaSなどのサービス運用へ切り替えることも利便性追求の一環となるでしょう。



※iPaaS: Integration Platform as a Service  
クラウド統合プラットフォームでのサービス利用

HULFT, HULFT Square, DataSpider Servistaおよびこれらのロゴは、日本その他の国・地域における、株式会社セゾンテクノロジーの商標、または、登録商標です。Pleasanterは株式会社インプリムの登録商標です。All right reserved, CEC Customer Service, Ltd.

CCS 株式会社 シーイーシーカスタマサービス <https://ceccs.site>

〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿1-5-5 JR恵比寿ビル8F  
TEL : 03-5789-2443 FAX : 03-5789-2575  
E-mail : ESECinfo@cec-ltd.co.jp